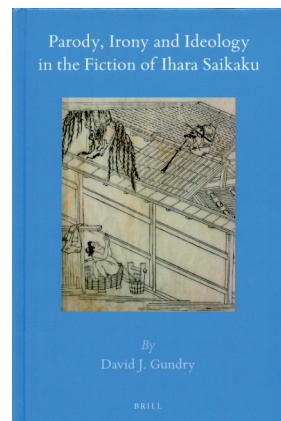


デイビッド・ガンドリー

## 『井原西鶴の小説におけるパロディ、アイロニー、イデオロギー』

David J. Gundry, *Parody, Irony and Ideology in the Fiction of Ihara Saikaku*

アンドリュー・ガーストル



Brill, 2017

実を言うと、私は昔から西鶴が苦手であつた。西鶴の浮世草子は、原文で読んでも英訳で読んでも作者の態度をつかみにくい。同じ人物に対する書き手のコメントに変化が多く、批判したかと思えば感心することもあり、読み手としてなかなか消化しにくい文体だつた。近松門左衛門に比べると、人間に対する視線が冷やかというか、どのようなスタンスで臨んでいるのかがわかりにくい。学生時代、早稲田大学で暉峻康隆先生（このおかげで）の落語のような講義を聴きながら、なんとなく西鶴作品のユーモアが分かったように思つた。が、結局西鶴が人物の描写を通して何を言いたかつたのか、人間はどうあるべきか、主人公にはどういう本心があるのか、などは一読者として戸惑いをぬぐえなかつた。

以上のような理由から、西鶴に関する書評の依頼を受けた時、

若干心許なかつた。しかしガンドリー氏の書を読んでみて、なるほど、西鶴の文体の方法とその魅力が見えてきた。氏の方法論は日本人の西鶴研究の業績を踏まえつつ、西洋の小説論（主にミハエル・バフチン）の観点から西鶴の作品——『好色一代男』、『好色五人女』、『本朝二十不孝』、『武道伝来記』——を徹底的に分析している。ガンドリー氏は小説論の東西の比較の立場から解釈するが、それを無理強いするのではなく、うまく西鶴作品の理解のために利用している。その基本の比較点はバフチンが論じるパロディの意義で、それを通してガンドリー氏は西鶴作品の類似点を説明し理解を深める。その中心にあるのがバフチンの対話（dialogic）という概念である。西鶴のほとんどの作品にそれが適用できるというわけだ。

... a dialogic interplay of competing voices making competing ethical and/or truth claims, a quality that Bakhtin saw as a central feature of novelistic discourse in the early phases of the European novel's development. (p. 161)

本書の中心は『好色一代男』の分析である。『一代男』は一番読みにくい作品であり、そして一番翻訳しにくいものであろう。ガンドリー氏は先行研究を踏まえながら、この作品を細かく分析・解釈し、その上、西鶴の文体の面白さを深く感じて、読者にそれを伝えようとしている。この章を読んで、個人的には『一代男』を好むまでには至らなかったものの、そのレトリックの方法が明快に説明されていると評価したい。

氏の論においてもそうであるように、『好色一代男』の文体を考える時、西鶴が俳諧連歌師であったことは、もちろんまず取り上げなければならない。俳諧の連歌の影響によって、散文の文体に連想と変化、パロディと雅俗の入れ混ぜがあり、書き手の態度が矛盾すると思われるほどに、主人公の罪を道徳的に批判しながら、他方で誉める場合もある。したがって、文学的な解釈は読者によりかなり異なる。

西鶴（やその他の近世の作家や画家など）が徳川幕府の社会や制度に対して批判的態度を示しているかどうかは、江戸時代の研究

にとって大きな課題である。江戸時代の文芸によく見られるパロディや風刺などという文学的な技法をどう解釈すべきかは、つねに難しい問題点である。とくに古典のパロディは、それが批判であるのか、あるいは雅の文化の獲得であるのか。ガンドリー氏も、西鶴が体制に対してとるスタンスについては微妙な境目に立っている。

A central assertion of this study is that the reigning sensibility of the works it examines is not iconoclastic or egalitarian but rather that of the ambitious and assertive bourgeois who is concerned with social self-advancement rather than levelling social distinctions. (p. 19)

However, I will seek to demonstrate that in general, despite mostly conforming to Bakhtin's definition of dialogic fiction, these four texts, and especially *Amorous Man*, which contains the most heterogeneous blend of linguistic styles and narrative modes, embody not an egalitarian worldview but rather a bourgeois will to make hierarchy depend on potentially acquirable assets such as money and cultural sophistication, rather than depend on birth, thus replacing a hereditary status system with a fluid hierarchy, a sort of meritocracy of the marketplace. (p. 22)

西鶴の意図がつかみにくいことは確かである。つまり西鶴は一方で「平等な（機会のある）」（*egalitarian*）社会を目指すことをせず、他方で、どういう身分に生まれても、個人の「実力（を重んじる）」（*meritocracy*）によつてヒエラルキーを上昇する世界観を示しているわけである。

『二代男』で西鶴作品の基本構造を明らかにしてから、他の作品へと移る。『好色五人女』は複雑なレトリックもあるが、物語としてはわかりやすい方であろう。ここでもガンドリー氏の分析は興味深いが、西鶴が『五人女』を書く以前に、五段の浄瑠璃を書いていたことを視座に入っていないので、背景要因が一つ足りないのを残念に思うが、文体の分析は徹底しており、各人物がはつきりと立ち上がってくる。

町人の世界とは違い、武士の物語である『武道伝来記』においては、「衆道」の関係の分析に主眼が置かれる。西鶴は衆道の関係が高く評価しながらも、（遊女の人物描写と同じように）「とびこ」を売春として哀れに描く一面もある。これもまた人物の描写を通じて書き手の態度の複雑さを捉えるための一例である。

結論として本書は、西鶴作品を深く読み込み、解釈論によく時間をかけ、先行研究を消化したうえで、作品を丁寧に細かく分析している。そしてガンドリー氏は西洋の小説史論とうまく比較をして、西鶴の複雑なレトリックの方法が、西洋の小説と類似点の

ある近世日本の「小説」を誕生させたと論じている。本書によつて、英語圏での西鶴理解は格段に高まるであろうと期待できる。